

腫瘍内科後期研修プログラム（2012年度）

がん診療の分野は腫瘍学（oncology）として急速に進歩しており、腫瘍学全体を体系立てた教育や診療・研究の必要性が高まっている。特にがん薬物療法の進歩は著しく、分子標的薬など新しい概念の治療薬も次々と登場している。つまり、有効性も向上した一方、進行度やバイオマーカーの発現などに応じた実施が必要となり、薬物療法の適応は益々複雑となっている。また、治療に伴う有害事象も多様化し、その管理も重要となってきている。薬物療法はがん診療全体を十分理解した上で実施する必要がある。

杏林大学医学部腫瘍内科学教室は、臓器や治療手段にとらわれず、がん治療を包括的な視野で捉えること、薬物療法を治療手段として実際の診療や教育・研究を行っている。また杏林大学病院が地域がん拠点病院に指定されたのに伴い、2008年4月、大学病院がんセンターが発足した。当腫瘍内科は大学病院がんセンターの中心を担う診療科でもある。

当腫瘍内科の専門研修プログラムは、がん薬物療法の適応、治療選択、治療変更、副作用管理など、独立して薬物療法が行える技量を獲得し、後進の指導が行えることを目標とする。患者個々の状態に応じて、緩和治療、精神腫瘍学の視点を含め、患者・家族の信頼に基づいた医療の実施を目指す。

本プログラムでは、科学に基づくがん薬物療法の実践、臨床試験など新しい標準治療やより有効な治療法の開発に関する研究を行える専門医の育成を目標としている。特に腫瘍内科専門医としては、がん診療だけでなく内科一般の診療を科学的根拠に基づいて確実に行える医師であり、心の通った診療が行える成熟した社会人であること、国際的な視野に立った研究や活動が行える幅広い知識と教養を身に付けることが必要と考える。

本後期研修プログラムは、杏林大学病院および他の施設での研修を含め、2-4年間の専門研修を予定している。

I. 研修内容

1. 研修目標

本研修は、胃がん、大腸がん、肺がん、肝がん、乳がんなど主要ながんの薬物療法についてそれぞれの理論的根拠や標準的治療法を理解し実践すること、薬物療法の開発のための臨床試験の基本的な事項を学ぶことを目標とする。さらに、薬物療法の治療効果や有害事象の評価や臨床試験に直接関与することで薬物療法の開発に携わり、またがん診療で重要な手術、放射線療法との協力や緩和治療など包括的ながん診療を実践していく。

研究としてはそれぞれのテーマに沿って、国内はもちろん国際学会を始めとする学会発表や英語論文の作成を行う。積極的に米国臨床腫瘍学会（ASCO）など国際学会にも出席し、国際的な視野に立った腫瘍内科医を目指す。またがん薬物療法専門医である日本臨床腫瘍学会専門医の取得を必須の目標とする。当腫瘍内科は日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）の肝胆膵グループの中核を担っており、JCOGでの臨床試験や腫瘍学を研修することもカリキュラムとして取り入れている。

2. 研修カリキュラム

- ① 1年次：最初の6ヶ月は腫瘍内科において入院患者を中心に診療を担当する。その後はその他の診療科を希望に応じてローテーションし、内科全般あるいはがん診療の研修および日本内科学会認定医や日本臨床腫瘍学会専門医の申請に必要な症例を経験する。
- ② 2年次以降：腫瘍内科に戻り、外来と入院患者の診療を一貫して担当する。1-3年間、希望に応じて国立がん研究センターなどがん専門病院あるいは総合病院での研修を行う。
- ③ 日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医取得のためのカリキュラム
 - 1) 複数の診療科のローテーションによる診療および本研修用の講義からなる。
 - 2) 診療科のローテーション
血液内科、呼吸器内科、呼吸器外科、乳腺外科、婦人科、泌尿器科、耳鼻咽喉科・頭頸科、整形外科、皮膚科、脳外科、小児科から少なくとも2科を選択してローテーションする。緩和ケアチームのローテーション1ヶ月以上を必須とする。

3) 同カリキュラムとして実施される講義

日本臨床腫瘍学会が指定しているカリキュラムのうち他科ローテーションでカバーできない領域について講義を受講することで研修する。

II. 取得できる専門医

1. 日本内科学会認定内科認定医，同専門医
2. 日本消化器病学会認定消化器病専門医
3. 日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医
4. 日本がん治療認定医機構認定医
など

III. 研修場所

1年次：杏林大学医学部附属病院

2-4年次：1-2年間杏林大学医学部附属病院での研修と1-3年間の国立がん研究センターなどがん専門病院あるいは一般総合病院での研修

IV. 研修の方法

1. 診療の実際

1年次は入院患者の診療を中心に、外来化学療法室での薬物療法の実施を行う。他の診療科をローテーションする場合はその科のカリキュラムに沿って研修する。その後は院外研修などを行った後、腫瘍内科に戻り入院と外来の一貫したがん診療に当たる。また学会発表、論文作成、臨床試験の計画・作成・実施などがん専門医として必要な研究を行う。

2. 院外研修

希望の期間に応じて杏林大学病院外の施設での研修を行う。国立がん研究センターなどがん専門病院での研修はがん専門医として貴重なものであり、積極的に推奨することとしている。研修先の施設により、レジデント試験など所定の試験が必要な場合もあり、状況に応じてサポートする。

3. 処遇

杏林大学病院の規程による。院外研修の場合は当該施設の規程による。

4. 大学院

大学院へ入学を希望する場合は初期臨床研修を修了し、所定の試験に合格の後、入学が許可される。大学院のカリキュラムに沿った上で可能な限り幅広い研修を行う。

VII. 後期研修終了後

杏林大学医学部腫瘍内科学教室のスタッフとして診療、研究に残る、あるいはがん専門病院にスタッフとして赴任するなどの選択肢がある。本人の希望を尊重し、相談しながら決めることとなる。また海外への留学も貴重な研修や研究歴となることから、希望があれば留学先の紹介など積極的にサポートする。

当科の研修に関する質問・要望がありましたら下記の臨床研修担当責任者に御連絡ください。

臨床研修担当責任者：長島文夫（内線：3585、PHS：7593、E-Mail：syuyo-naika@ks.kyorin-u.ac.jp）